

十八世紀ドイツ語純化論の成立とその社会的意義

ヨアヒム・ハインリヒ・カンペを例として

吉田 耕太郎

§ 1 : はじめに

§ 2 : 純化論前史－豊富化

§ 3 : カンペの純化思想

§ 4 : アーデルンクとの比較

§ 5 : 公共性と均質性－結論的考察

§ 1 : はじめに

標準語は標準から外れる言語を排除して言語的均質空間を作り出す。その一方で均質的な空間は、共通な言語による意見交換が可能となる一種の公共性の実現でもある。改めて強調するまでもなく、標準語の制定は、国家という均質的な空間を作り出すために必要不可欠な作業であった。困難さは、標準語が排他的であると同時に公共性の実現を担っている点にある。標準語が公共的な空間を切り拓くものであるから、そこに参与するためには唯一のパスポートである標準語をマスターしなければならないということだ。標準語の習得とはもちろん比喩的な意味で理解されなければならない。標準語に自らを語るレトリックが用意されているかどうか、自らの語りを有意味とする背景が存在しうるかが問題であって、もし標準語で自ら

を語ることが出来なければ、自らを語る標準語を作り出さなければならないのである。それが多元化や多様化という言葉に託された課題であろう。

本稿ではこうした現状批判からさしあたり距離をおき、標準語が言語的均質空間と公共性の創出という二義的な機能を担うことになった背景を、十八世紀後半のドイツ語純化論をモデルに確認することにした。十八世紀後半の純化論は、領邦国家から近代的国家への変遷と、身分制社会から市民的社会への移行という二つの社会状況と本質的に絡み合っていた。従って十八世紀後半の純化論の考察は、今日的な意味での標準語＝国語の生成過程の解明にも通じることになる。

数ある純化論の中でも本稿で扱うのは、ヨアヒム・ハインリヒ・カンペ Joachim Heinrich Campe (1746-1818) の純化論である。十八世紀後半に現れた教育論・汎愛主義 Philanthropismus の理論的代表者として、また『ロビンソン・ジュニア Robinson der

Jüngere 』¹に代表される児童文学作家として知られるカンペは、人間の感覚能力に関する優れた論考を残す哲学者でもあり、フランス革命の理念を広める時事的文章や政治文書を執筆するジャコバン派のジャーナリストでもあった。多岐に活躍したカンペの言語への関心は特に強く、言語を題材とした専門雑誌²の発刊やドイツ語辞書の編纂を手掛けた程であった。1999年、言語学者としてのカンペに光を当てる研究が発表された。オルゲルディンガーの『ヨアヒム・ハインリヒ・カンペのドイツ語標準化と純化主義』³は、カンペの言語純化論の独自性を、同時代の言語学者アーデルンク Johann Christoph Adelung (1732-1806) との比較によって解明した研究である。標準ドイツ語の制定や辞書編纂は、プロイセン・アカデミーの創立当初からの課題の一つであったが、本格的なドイツ語辞書を実際に編纂してみせたのがこのアーデルンクとカンペの二人であった⁴。

1 カンペのこの作品のデフォーの『ロビンソン・クルーソー』を題材としたいわゆるロビンソンもの (Robinsonade) の一つであるが、1900年までの統計資料によれば、本家のデフォーのドイツ語版が10回の再版を記録したのに対し、カンペのこの作品は200版を重ねたドイツで最も普及したロビンソンものであった。更に仏訳17版、英訳5版、英語による改作を35作という記録が語るように、全ヨーロッパで普及したロビンソンものの一作であった。Cf., Green, Martin Burgess 『ロビンソン・クルーソー物語』(訳: 岩尾龍太郎、みすず書房、1993年)、pp. 70-71.

2 *Beiträge zur weitem Ausbildung der Deutschen Sprache von einer Gesellschaft von Sprachfreunden*, Braunschweig, 1795-1797.

3 Ongedlinger, Sibylle *Standardisierung und Purismus bei Joachim Heinrich Campe*, (Walter de Gruyter, 1999). なお著作からの引用箇所は[OD 頁数]という形で指示する。

4 当時のプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム一世は、1710年のアカデミー設立当初からドイツ語辞書の編纂をアカデミー

オルゲルディンガーの研究を利用し、本稿はカンペの純化論の再構成を試みる。ただオルゲルディンガーの研究は言語学的性格が強く、純化論を取り巻く知的コンテキストやその社会的意義についての言及は十分ではない。オルゲルディンガーの研究を補足する意味を含め、特に純化論の成立過程を解明し (§2)、純化論の社会的意義を均質性と公共性として論じてみたい (§5)。

§2: 純化論前史—豊富化

純化論の背景について簡単に確認しておくことが必要であろう。カンペのドイツ語純化論は、1792年4月27日に告示されたプロイセン・アカデミーの懸賞論文として執筆された⁵。この

の課題の一つとして推進していたが、実現には到らなかった。Vgl., Brather, Hans-Stephan *Leibniz und seine Akademie*, (Akademie Verlag, 1993), S. 403-404; Haß-Zumkehr, Ulrike *Deutsche Wörterbücher*, (De Gruyter, 2001), S. 91.

5 このカンペの懸賞論文については、以下四つの版 (A, B, C-1, C-2) が確認されているが、本稿では1813年に出版された最終版 C-2 を使用する。このカンペの純化論からの引用は[Campe 頁]という略称で提示する。

A: 1793年アカデミーに提出された懸賞論文 (未出版)

B: A版に加筆・修正を加え出版されたもの *Ueber die Reinigung und Bereicherung der Deutschen Sprache, Dritter Versuch, welcher den von dem königl. Preuß. Gelehrtenverein zu Berlin ausgesetzten Preis erhalten hat von Joachim Heinrich Campe'n Herzogl. Braunschweig. Schulrath*, Verbesserte und vermehrte Ausgabe, Braunschweig, 1794.

C: B版に更に修正を加えたもので、カンペ編纂の辞書に序文として掲載されたもの (Bに比べて短い論文となっている)。二つの異版があるが、題名と内容は共に同じである。

C-1: "Grundsätze, Regeln und Grenzen der Verdeutschung" in: *Wörterbuch zur Erklärung und Verdeutschung der unserer Sprache aufgedruckten fremden Ausdrücke, Ein Ergänzungsband zu Adelung's Wörterbuche von Joachim Heinrich Campe*, Braunschweig, 1801.

C-2: "Grundsätze, Regeln und Grenzen der Verdeutschung" in:

懸賞論文はドイツ語の純化を問題とするものであった⁶。だが懸賞課題から、カンペをはじめ当時の純化論が取り組んでいた問題を十分に捉えることはできない。十八世紀後半、純化論とは単なる言語論ではなかった。言語の純化は、言語の豊富化、充実 *Bereicherung* とそもそも関係するものであった⁷。1794 年に出版されたカンペの懸賞論文のタイトル『ドイツ語の純化と豊富化 *Ueber die Reinigung und Bereicherung der Deutschen Sprache*』からは、カンペが純化を豊富化と関連付けて考察していたことが分かる。

Wörterbuch zur Erklärung und Verdeutschung der unserer Sprache aufgedrungenen fremden Ausdrücke, Ein Ergänzungsband zu Adelung's und Campe's Wörterbüchern, Braunschweig, 1813.

6 懸賞論文の課題は次の通りである：1) 言語一般または特にドイツ語の完全なる純粋性は可能であり必然的なものであるか。2) いかにしてまたいかなる原理に基づいて、ドイツ語の純化は最も促進せられるか。3) ドイツ語の本質的な完全性を損なうことなく、純化はどの程度まで行われうるか、または行われなければならないか。4) ドイツ語に含まれる語彙 *Sprachschatz* の中でも、どのような語彙が外来語として判別され、逆にどのような語彙が外来語として判別することができなかったり、こうした選別から不利を被ることになるか。Preisaufrage über die Frage: Ist vollkommene Reinheit einer Sprache überhaupt und besonders der Deutschen möglich und notwendig? Wie und nach welchen Grundsätzen kann die Reinigkeit der deutschen Sprache am besten befördert werden? Wie weit kann und muß dieselbe getrieben werden, ohne ihr noch wesentlichere Vollkommenheiten aufzuopfern, und welche Theile des deutschen Sprachschatzes bedürfen vorzüglich die Absonderung des Fremdartigen, in welchen andern hingegen würde diese Absonderung unthunlich oder nachtheilig sein? [OD 408].

カンペは更に、5) そしてドイツ語の純化と充実化がいかなる原理に基づいて推進されなければならないか、という問を付け加えている。[Campe 3]: Wie und nach welchen Grundsätzen muß die Reinigung und die Bereicherung der Deutschen Sprache geschehen? 7 純化論の展開経緯に関しては、モーリッツの下記論文が有益な情報を与えてくれる。Vgl. Moritz, Carl Philipp "Über die Bildsamkeit der Deutschen Sprache", in: *Deutsche Monatsschrift*, 1792, Band 1, IX, S. 168-172; Ders., "Auszug aus einer Nachricht an das Publikum von den bisherigen Beschäftigung der Akademischen Deputazion zur Kultur der vaterländischen Sprache", in: *Berlinische Monatsschrift*, 1792, Band 2, S. 491-494.

同懸賞論文の次点キンダーリンク Johann Friedrich August Kinderling (1743-1807) もその論文の中で明言しているように⁸、純化とは言語の充実を進める一つの手段であった。

言語の充実化を問題として提示したのは、フリードリヒ・ゲーディケ Friedrich Gedike (1754-1803) であった。ゲーディケは、カントが『啓蒙とは何か』を寄稿した『ベルリン月報 *Berlinische Monatsschrift*』の編集者として知られるプロイセンを代表する啓蒙知識人の一人であった。1779 年、『ドイツ・ミュージアム *Deutsches Museum*』に発表した論文⁹の中で、ゲーディケは充実化を問題として提示し、その答えとしてドイツ語と外来語の選り分けに相当する純化とドイツ語諸方言における標準化という二つの試みを論じている¹⁰。このゲーディケの議論がカンペをはじめとする純化論の方向性を規定することになった。

「言語というものは超自然的に創造されるものでもなく、民族によって恣意的に決められるものでもない」¹¹という議論からゲーディケ

8 Vgl. Kinderling, Johann Friedrich August *Über die Reinigkeit der Deutschen Sprache, und die Beförderungsmittel derselben*, (Berlin, 1795, Nachdruck: Zentralantiquariat Leipzig, 1977), S. 8: Mit der Reinigung der Sprache muss also allemahl Bereicherung [...] verbunden seyn.

9 Gedike, Friedrich "Gedanken über Purismus und Sprachbereicherung" in: *Deutsches Museum*, 1779, Band 2, 11. Stück, S. 385-416.

10 Gedike, a. a. O., S. 393-394: Es lassen sich überhaupt nur zwei Quellen der Sprachbereicherung denken. Entweder geschieht sie durch auswärtigen Handel, oder durch inländischen Betrieb.

11 Gedike, a. a. O., S. 385: Keine Sprache entstand auf einmal, weder durch übernatürliche Anschaffung [...] noch durch willkürliche Volksverabredung.

の論文ははじまっている。ここで彼が言及しているのは、言語起源論争の二つの立場、ジュール・スミルヒの言語神授説とそのヘルダーの批判である¹²。ジュール・スミルヒが言語を神から与えられたものと主張したことに対し、ヘルダーは、言語が人間の精神によって作り出されたものと捉え、そこから民族¹³の多様性を反映する言語、話者である民族と共に歴史的に展開する言語観を提示した¹⁴。

この言語起源論への言及から充実化が取り組んでいた問題の概要が明らかになる。充実化とは、言語起源論争から現れてきた言語観が必然的に提起する問題に答えたものであった。言語起源をめぐる論争が、言語の相対性と歴史性という意識を一般化したとすれば、充実化が問

題としたのは、当時の完全性理念に基づく形での相対性と歴史性の一種の克服、つまりその到達点である完全性を見定め、言語を完全なるものへと展開させることであった。

1759年のアカデミー懸賞論文、言語と思考との相互影響作用の問題が端的に示すように、言語は言語の問題にとどまるものではなく、その話者(集団)と密接に結び付くものであった¹⁵。

「ある民族の文化が展開するに従って、言語も展開する」¹⁶というゲーディケの主張そしてカンペも認める言語と話者の特質との相互関係は¹⁷、このようなコンテキストを背景として成立したものである。言語が歴史的に展開するならば、それは話者集団の文化の展開でもあり、語彙の豊かさはそのまま話者集団の知識の蓄積を現していた。言語はなによりも文化レベルを示すしるしであったのである。それゆえ言語の完全性を目指す充実化は、言語の展開を通じて話者集団の文化の洗練を目指していた。更に1782年の懸賞論文の課題としてアカデミーが取上げたフランス語の普遍性をめぐる論争¹⁸も

12 この論争は1740-1770年の間に行われたものであり、そもそも言語の起源に関する英・仏の経験論的哲学考察に端を発している。この論争の概略は下記文献を参照のこと。Cf., Aarsleff, Hans "The Tradition of Condillac", in: *From Locke to Saussure*, (University of Minnesota Press, 1982), pp. 146-209; Franzen, Winfried "Einleitung", in: Maupertuis, Pierre Louis Moreau de *Sprachphilosophische Schriften*, übersetzt und herausgegeben von Winfried Franzen, (Felix Meiner Verlag, 1988), S. VII-LXIV.

13 十八世紀後半、言語の話者としていかなる集団が考えられていたのか。この問題には簡単に答えることはできず、本稿でも詳細な議論の展開を差し控えなければならぬ。以下の議論からも明らかになるように、例えば本稿で扱う知識人(ゲーディケ、カンペ、アーデルンク)は、低地ドイツ語、中部ドイツ語、高地ドイツ語をドイツ語の方言とみなし、これら諸方言の話者を Volk, Nation ドイツ語話者として位置付けているようである。他方メンデルスゾーンは、ベルリン人とニュンベルク人を、イギリス人とフランス人と並ぶ語として使用している。Vgl., Mendelssohn, Moses "Ueber die Frage: Was heißt aufklären?", in: *Berlinische Monatsschrift*, 1784, Band 2, S. 195.

14 Cf., Aarsleff, op. cit., p. 195-196. ヘルダーの言語起源論についての日本における最近の研究として、以下の二冊をあげておきたい。亀山健吉『言葉と世界』(法政大学出版局、2000年)、pp. 119-126; 斎藤渉『フンボルトの言語研究』(京都大学学術出版局、2001年)、§§ 18-32.

15 この懸賞論文については、下記のミヒャエリスの受賞論文とその詳細な註を参照のこと。Cf., Michaelis, Johann David *De l'influence des opinions sur le langage et du langage sur les opinions*, avec un commentaire par Helga Manke, (frommann-holzboog, 1974).

16 Gedike, a. a. O., S. 387: Je mehr ein Volk kultiviert, um destomehr wird es auch seine Sprache.

17 [Campe 9]: Daß alle diese Eigenthümlichkeiten eines Volks und die Sprache desselben einen unverkennbaren gegenseitigen Einfluß und Rückfluß auf einander durch Wirkung und Rückwirkung haben [...].

18 この懸賞論文については下記の詳細な註を参照のこと。Vgl., Goyon d'Arzac, Guillaume Henri Charles de *Essais littéraires et philosophiques sur les causes de l'universalité de la langue française* (1783), herausgegeben, eingeführt und mit Anmerkungen versehen von

考慮にいれることで、充実化が直面していた問題が更に具体的になる。この論争はフランス語がラテン語に代わるヨーロッパの共通言語となりうるかどうかを論じたものであった。豊かな語彙を持ち文化的にも洗練したフランス語に対し、充実化はドイツ語をそれと比肩する言語へと完全化する（豊かにする）という具体的な目的を担うことになったのである。

こうした言語をめぐる一連の論争から、外来語使用への批判的態度や母語であるドイツ語による執筆活動そしてドイツ語教育という問題意識がドイツの知識人の中で形成されることになる¹⁹。十八世紀後半、ドイツでは宮廷や上流階級は言うまでもなく都市住民の間でも、日常の言語活動の中にフランス語を異様なまでに織りまぜる風潮が広まっていた²⁰。こうした風潮は、フランス語使用が文化的な洗練さのしるしとして受取られていた当時の雰囲気を与えている²¹。フランス語の手紙を趣味ある手

紙の見本とみなすゲラートのような文学人も存在するなかで²²、フランス語の過度な使用に対して批判的な態度を取り、ドイツ語化を強く推奨する知識人も同時に現れるようになった²³。このようにして、充実化という問題設定のもと、外来語を排除する純化思想が徐々に形成されてきたのである。ただし当時の純化論を推進したのは、ドイツ的なものの創出を主眼とした民族主義・国民主義的な思想ではなく、むしろフランスの知識人を迎え入れフランス語を重用するフリードリヒ二世²⁴への、またフランス風趣味に偏重するドイツ貴族階級への批判であり、それも理解できない外国語は明晰判明な真理認識の妨げになるという認識論的な関心に端を発するものであった²⁵。純化を進める理由としてカンペが念頭に置いていたのもこの認識論的関心であった。外来語は理解することのできない言葉であって、その使用は思考の混乱や誤解を産む原因とみなされていた²⁶。言語

Jürgen Storost, (Romanistischer Verlag, 2000).

19 Vgl., Haßler, Gerda *Johann August Eberhard (1739-1809) - ein streitbarer Geist an den Grenzen der Aufklärung*, (Hallescher Verlag, 2000), S. 60-62.

20 Vgl., Steinhausen, Georg *Geschichte des Deutschen Briefes*, 2 Bände (Berlin, 1889 und 1891, Nachdruck: Georg Olms Verlag, 1968). 主に第二巻を参照のこと。

21 前述の 1782 年のアカデミー懸賞論文はドイツ知識人たちにフランス語使用への反省の機会を与えることになった。本稿執筆にあたっては特にエーバーハルトの論文を主に参照した。フランス語がドイツで重用される理由としてエーバーハルトは以下の三点を指摘している。1: フランス語の言語的卓越性、2: フランス語（話者）の文化的卓越性、3: フランスの政治的影響（ヨーロッパ諸国での絶対王政の受入れ）。Vgl., Eberhard, Johann August "Ueber die Allgemeinheit der französischen Sprache", in: Haßler, a. a. O., S. 63-77.

22 Gellert, *Briefe, nebst einer praktischen Abhandlung von dem guten Geschmacke in Briefen*, Leipzig, 1751, in: Christian Fürchtegott Gellert *Gesammelte Schriften*, herausgegeben von Bernd Witte, (Walter de Gruyter, 1989), Band IV, S. 133-134.

23 このようなドイツ語化を最も早い段階から主張していた知識人の一人がゴットシェートであろう。Vgl., Gottsched, Johann Christoph *Die Vernünftigen Tullerinnen*, Halle, 1725, (Nachdruck: Georg Olms Verlag, 1993), 2. Stück. ここではフランス語混在の新年の挨拶が、嘲笑の対象として取り上げられている。

24 Vgl., Brief am 1. 9. 1808 vom Christian Daniel Voss an Campe: Jetzt erkennen bereits die Hohen des Volkes, die seit Friedrich uns undeutsch machten, dass deutsche Sprache und Litteratur unsere Nothanker sind; zitiert nach Fertig, Ludwig *Campe's politische Erziehung*, (Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977), S. 65.

25 Vgl., Martens, Wolfgang *Die Botschaft der Tugend*, (Metzler, 1971), S. 413-414.

26 [Campe 7].

が認識を促進する道具として機能させることは、言語の完全性を目指すことに他ならなかったのである。

また「方言の残る地域は、悪趣味、フランク王国時代の黴臭い習俗、愚昧な偏見、片辺の鈍い思考様式がいまだに残っている」²⁷という当時の週刊道徳雑誌の記述が示すように、方言差も話者集団の文化レベルを示すものとみなされていた。言語がよりよいものになれば、方言はなくなる²⁸とゲーディケが述べるように、方言とは話者集団の文化レベルのばらつきを意味していたのである。「国民の言語 *Sprache eines Volks* が、その教育レベルを示す最適な指標となる」と述べ、ギリシャ語とギリシャ人の文化を講えたメンデルスゾーン²⁹やヴィーラントが推進した文化の洗練を核とする啓蒙論をここに重ね合わせることもできるであろう。方言を一掃し言語的均質化を行う標準語制定も、まず第一に文化の洗練という目的を持っていた。言語の純化は話者の精神的道徳的教化へつながらとするカンペが純化へ託す役割も同じベクトルを持つものであった³⁰。このように充

実化は、その独自の言語理解を前提に、ドイツ語の純化と標準化の問題として取組まれることになった。

§3 : カンペの純化思想

カンペが純化の基準として主張するのは、一般理解可能性 *Gemeinverständlichkeit* とドイツ語としての類型性 *Sprachgleichförmigkeit* (*Analogie*) の二つであった³¹。

カンペが援用する類型性 *analogia* という基準は、そもそも古典ギリシャ及びローマ期の文法概念であり、言語現象の規則性を示す概念であった³²。例えばゲーディケは類型性を新しく作り出された単語や表現の理解可能性を保障するための規則と位置付け、同時に品詞交替（例えば接尾辞 *-ung, -er* による動詞の名詞化や *-ig* による名詞の形容詞化）や接頭辞形成（特に非分離の前綴りが例としてあげられている）による造語を具体例としてあげている³³。類型性とは、創作活動の中で作り上げられる新たな表現、新たな語彙が理解可能であるために、犯してはならない広い意味での言語規則を意味していた³⁴。厳密な規定を与えていないもの

27 *Der Westphälische Beobachter*, 1756, S. 8; zitiert nach Martens, a. a. O., S. 417-418.

28 Gedike, a. a. O., S. 414: Dialekte hat jede Sprache, muß jede haben, wenn's gleich besser wäre, sie hätte sie nicht.

29 Mendelssohn, a. a. O., S. 195-196: Sie [=die Griechen] waren eine gebildete Nation, so wie ihre Sprache eine gebildete Sprache ist. - Ueberhaupt ist die Sprache eines Volks die beste Anzeige seiner Bildung [...].

30 [Campe 10]: zur geistigen und sittlichen Ausbildung desselben [des Volks] zu wirken.

31 この二つの規定は諸所に現れてくるが、特に下記頁を参照のこと。[Campe 8, 10, 49].

32 Vgl., Lersch, Lorenz *Die Sprachphilosophie der Alten, dargestellt an dem Streite über Analogie und Anomalie der Sprache*, (Bonn, 1838, Nachdruck: Georg Olms Verlag, 1971).

33 Vgl., Gedike, a. a. O., S. 408, 410-411.

34 Moritz, "Auszug aus einer Nachricht an das Publikum von den

の、カンペは、類型性でドイツ語の形態的特質つまり-e, -en といった格変化や活用語尾として頻出する文法的な現象やドイツ語特有の子音の並びを念頭に置いている。英語、フランス語と比較してドイツ語はラテン語には馴染みにくく、ラテン語からの借用語は妙なごちゃごちゃした印象が残ると主張する³⁵モーリッツ Karl Philipp Moritz (1757-1793) も、類型性を各言語特有の形態的特徴の意味で理解している。類型性という用語を持ち出す際に、カンペがこうした類型性の伝統的定義を念頭においていたことは間違いない。ただカンペは、この類型性を純化のもう一つの基準である一般理解可能性との関係で考えていた[OD 92]。類型性にあてはまらない言葉は、確かに外来語である。しかし類型性にあてはまらない外来語であっても、それが一般理解可能な言葉であれば、ドイツ語として受け入れられることになる。それゆえカンペは、本来は外来語であってもそれが類型性にあてはまる程にドイツ語に順化したもの *eingebürgert* や一般に理解可能な言葉であるならば排除の対象にはしない³⁶。また近年発

見されヨーロッパにもたらされた物品の名前（例えば煙草、茶、ダイヤモンド）も排除の対象ではない³⁷。学術専門用語としての外来語も、代替可能なドイツ語が存在しない場合は使用が認められ、そのドイツ語へ翻訳や語義の順化が知識人の課題として主張されているのである³⁸。

このような純化論をカンペが展開した理由の一つは、彼が極端な純化論から距離を置いていたからである。純粋な言語など他言語との接触を一切断ったおとぎの国エルドラド *Feenland Eldorado* にしか存在しないと主張するカンペは、通時的かつ共時的な言語接触を言語の本質的なありかたとみなし、極端な純粋性の追求を非現実的な企てとして退けている³⁹。当時の比較言語学では、ドイツ語が英語やオランダ語など他のゲルマン系の言語が派生する祖言語 *Stammsprache* であること、いわばドイ

Sprache entlehnt haben, [...] verdienen, wofem sie einmahl wirklich schon eingebürgert und volksmäßig geworden sind, [...] jetzt nicht mehr ausgemäzt, sondern beibehalten zu werden.

37 [Campe 22]: *Taback, Kaffee, Thee, Zucker, Diamant, Taffet [= Taft].*

38 [Campe 23].

39 [Campe 3-4]. なお同様の主張をキンダーリンクも行っている。Vgl., Kinderling a. a. O., S. 4: *Eine hohe Stufe der Reinigkeit könnte in der Sprache der Einwohner einer entlegenen Insel herrschen, welche mit andern Menschen wenig Gemeinschaft haben, und doch wird nicht alle zufällige Einmischung eines fremden Sprachstoffs unterbleiben. Kurz, vollkommene Reinigkeit ist ein Unding.*

それでもカンペの純化論は当時の知識人にとっては十分過激なものであったことも指摘しておくなければならない。例えば Campe, “Proben einiger Versuche von deutscher Sprachbereicherung”, in: *Braunschweigisches Journal*, 1790, 11. Stück, S. 257-296, に対するシュヴァルツの書評を参照。Vgl., Schwarz, J. L. G. “Schreiben an den Herrn P. T. in W. Ueber die Reinigung und Bereicherung der Deutschen Sprache”, in: *Deutsche Monatsschrift*, 1791, Band 2, S. 25-35.

bisherigen Beschäftigung der Akademischen Deputazion zur Kultur der vaterländischen Sprache”, S. 492: [...] nach welchen [=Regeln Herrn Professor Ramlers] man neue Wörter jeder Art bilden kann, ohne die Sprachähnlichkeit oder Analogie zu verletzen. なおここで明示されていないが、モーリッツが念頭に置いているラムラーの著作は以下のものであろう。Ramler, Karl Wilhelm *Über die Bildung der deutschen Nennwörter und Beywörter*, Berlin, 1796. この著作の中でラムラーは、接尾辞による造語について詳しく議論している。

35 Vgl., Moritz, “Über die Bildsamkeit der Deutschen Sprache”, S. 169: *ein seltsames buntes Ansehen.*

36 [Campe 20]: [...] auch solche Wörter, die wir aus einer fremden

ツ語とはロマンス系言語にとってのラテン語と同位置にある言語であるとの議論が展開されていた⁴⁰。フランス語はその祖言語であるラテン語由来の単語を取除くことはできないが、そもそも祖言語であるドイツ語は完全なる純化が可能であり、ラテン語からフランス語が発展したようにドイツ語も同様の発展が可能であると主張されていたのである⁴¹。しかしカンペの純化論はあくまでも「ドイツ語の類型性に矛盾するような、または民衆の言葉と接点をいまだ持っていない言語」⁴²を排除するものであった。

カンペの純化論は、極端な純化運動を牽制するものである反面、純化の規定としては不徹底なものとして現れてくる。例えば外来語がドイツ語に順化していると判断する基準はどこにあるのかカンペはその基準を提示してはいない。また全く理解できず混乱をもたらす言葉や表現や⁴³、醜く非道徳的で粗野な表現⁴⁴もカンペは排除の対象とするが、その粗野で汚い表現の

判断基準についても、カンペは一切答えていないのである。

「類型性という条件を満たした、ドイツ人の一般的な書き言葉であり日常語が標準ドイツ語となる」⁴⁵とカンペが述べているように、ドイツ語の標準化も類型性と一般理解可能性という二つの原理によって進められた。標準語を導き出すための考察の対象となっているのは、印刷物として残されている通時的な差異、方言に見られる共時的な地域差、さらに学術の分野で日々作り出される新造語である。特に方言のバリエーションの考察では各地方で編纂された方言辞書を基礎としているように⁴⁶、考察の対象となっているのは書かれた言葉だけであり、また社会階層間のドイツ語の違いについても言及されていない[OD 183]。

カンペはドイツ語の方言を高地ドイツ語、中部ドイツ語、低地ドイツ語の三つに分け、特に高地ドイツ語と低地ドイツ語について細かな特徴の説明を行っている⁴⁷。ただし類型性そして一般理解可能性という二つの基準を満たすためにカンペが進むのは文字通りの中道であった。複数の方言の影響が流れ込む中間に位置する中部ドイツ語は、多くの方言に共通の性格を持ち、類型性と一般理解可能性という基準を

40 Vgl., Schottelius, Justus Georg *Ausführliche Arbeit von der deutschen Hauptsprache*, (Nachdruck: herausgegeben von Wolfgang Hecht, Niemeyer, 21995); Rüdiger, Johann Christian Christoph *Grundriß einer Geschichte der menschlichen Sprache nach allen bisher bekannten Mund- und Schriftarten mit Proben und Bücherkenntniß*, Leipzig, 1782.
41 Kinderling, a. a. O., S. 10-11, 15, 75.

42 [Campe 16]: [...] diejenigen hingegen, welche der Detuschen Sprachähnlichkeit widerstreben und noch keinen Eingang in die Volkssprache gefunden haben, auszumärzen [...].

43 [Campe 17]: die Wörter, die etwas nicht Denkbare; die ausländischen Wörter, [...] die Begriffe von Recht und Unrecht wankend machen oder in Verwirrung bringen können.

44 [Campe 17]: alle schmutzige, unsittliche und pöbelhafte Ausdrücke fremder Sprachen.

45 [Campe 37]: [...] welches der allgemeinen Deutschen Sprachähnlichkeit gemäß und deßwegen werth ist, in die allgemeine Schrift- und Umgangssprache der Deutschen aufgenommen zu werden.

46 Vgl., [Campe 39-40].

47 [Campe 53-54]: Oberdeutsch, Mitteldeutsch (Meißnisch, Thüringisch und Fränkisch) und Niederdeutsch.

一番に満たすというわけだ。ただし中部ドイツ語がそのまま標準語になるわけではない。あくまでも中部ドイツ語は標準語の基礎にとどまり、中部ドイツ語に含まれないものの必要な語や表現は類型性という基準に合うかぎりで方言から補完されなければならないことをカンペは強調する⁴⁸。方言調査機関のドイツ各地への設置をプロイセン・アカデミーにカンペは申請していたが、できるだけ多くの方言の比較によって標準語が導き出されるとカンペは考えていたのである[OD 183]。オルゲルディンガーは、こうしたカンペの標準語の模索を方言の均一化と呼び、カンペが求める標準語を均質言語 *Ausgleichsprache* と言い換えてもいる[OD 121, 177]。

このようにカンペの純化論を確認しても、純化された言語・標準語の実質的な姿は明らかになつたとは言えない。そもそも純化の原理である一般理解可能性の一般とは誰のことであるのか、カンペは最後まで明示することはなかったのである。カンペの純化論は純化された言語を具体的に導き出すことを目的とするのではなく、むしろ理念としての性格の強いプログラムであった。こうカンペの純化論を解釈するのがオルゲルディンガーの研究である。オルゲルディンガーによれば、カンペにとっての純化さ

れた言語とは、むしろこれから作られるべき言語であり、純化論はその構想であった。このようなカンペの純化論の性格とその意義は、アーデルンクの標準化論との比較によって具体的になる。

§4：アーデルンクとの比較

本格的なドイツ語辞書編纂により今日のドイツ語辞書の基礎を築いたアーデルンクは⁴⁹、ドレスデン・ザクセン選帝侯図書館の司書を務めた言語学者であった。『標準ドイツ語とはなにか *Was ist Hochdeutsch?*』と題された小論の中で、アーデルンクは自らの標準化論を簡潔に述べている。

アーデルンクは標準ドイツ語は、全ドイツで出版される書籍で使用されている一般的な書き言葉で、教育を受けた様々な身分に属する人々、ドイツの大多数が社会的なやりとりで使用している言葉と定義している⁵⁰。ただし充実化で確認したように、言語の展開を話者集団の

49 *Adelung, Versuch eines vollständigen grammatisch-kritischen Wörterbuchs der hochdeutschen Mundart, mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen*, 5 Bände, Leipzig, 1775-1786; Ders., *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart*, Leipzig, 4 Bände, Leipzig, 1793-1801. 後者は前者の第二版にあたる。またアーデルンクが後世の辞書編纂に与えた影響に関しては以下の研究およびそこで言及されている幾つかの研究文献を参照のこと。Vgl. Haß-Zumkehr, a. a. O., S. 106.

50 Adelung, "Was ist Hochdeutsch?" in: *Magazin für die Deutsche Sprache*, Leipzig, 1782, (Nachdruck: Georg Olms Verlag, 1969), S. 1-31; S. 1.

48 [Campe 45]: [...] laßt uns [...] diejenigen Mundarten, aus welchen das H. D. [=Hochdeutsch] zunächst hervorgegangen ist - die Meißnische oder Obersächsische, die Fränkische und Thüringische = die Mitteldeutsche Mundart nennen [...].

文化レベルのしるしと捉える言語観を共有していた⁵¹アーデルンクにとって、標準語とは方言の中でも最もよいものが取り出されたものことであった⁵²。具体的に言えば、洗練された文化を有する宮廷や上流階級の人々 *die höhern Classen der Nation* によって現実に使用されている言葉である⁵³。

洗練した文化や支配的な文化が浸潤するのと同じように、洗練された方言が普及し受け入れられる。この現象を実証するためにアーデルンクは、過去の支配的な方言の推移を文化や趣味の変遷として論じてみせる。アーデルンクによれば十八世紀後半の最も洗練された方言は高地ザクセン方言であった。「高地ザクセンで、知性、趣味、習俗の啓蒙がなされたことは誰もが知るところである」⁵⁴。それゆえこの地方で使われている言葉は、他の方言よりも必然的に洗練されたものであり、高地ザクセン方言の普及は、従って最新の学芸の伝播また地方に残る古い趣味や習俗の洗練を意味していた。アーデルンクにとって標準語とは、文化が最も花開き教養の最も蓄積された地方の言葉または洗練

された趣味の浸潤する都市の言葉であり、話者集団はそこの上流階級なのである⁵⁵。標準ドイツ語とは、高尚ないわば洗練されたドイツ語つまり上流階級のドイツ語であった⁵⁶。

数ある方言の中でも最も文化的に展開し洗練された方言を標準語とみなし[OD 126]、高い教養や文化を持つ人々が現実に使用している言語を標準語のモデルと位置付ける[OD 124, 136, 168]。このようにアーデルンクの言語論の特徴をオルゲルディンガーは指摘し、アーデルンクの言語論をエリート主義 *eine kulturelle und sprachliche Elite* と名付けている[OD 126]。確かにアーデルンクの辞書には上流階級の言葉だけでなく俗語や隠語も含まれており、辞書編集に際してはフリッシュ *Johann Leonhard Frisch* (1666-1743) や クラマー *Matthias Kramer* (1640?-1727?, 1730?) をはじめ先人の辞書類が利用されている⁵⁷。だがあくまでも洗練された文化を伴う上流階級が現実に使用している言葉を標準語とみなすアーデルンクの標準化論は、ある特定の集団の言語と文化を特権化し、それ以外の方言を実質的に駆逐することになるからだ⁵⁸。

そして標準語を現存する言語とみなすアーデルンクの立場と対比する時、カンペの純化論

51 Vgl., *Adelung, Mithridates oder allgemeine Sprachenkunde mit dem Vater Unser als Sprachprobe in bey nahe fünf hundred Sprachen und Mundarten*, Erster Theil, Berlin, 1806, (Nachdruck: Georg Olms Verlag, 1970), Vorrede: [...] so viele Völker von so vielfachen Graden der Cultur sich ihre Gedanken, ihren Sinn und Unsinn mittheilen.

52 Adelung, "Was ist Hochdeutsch?", S. 4: [...] durch Aushebung des Besten aus allen ihren Mundarten [...].

53 Vgl., Adelung, a. a. O., S. 5.

54 Adelung, a. a. O., S. 22: Man weiß, daß die in Obersachsen bewirkte Aufklärung des Verstandes, des Geschmacks und der Sitten sich von hier über alle Deutsche Provinzen verbreitete [...].

55 Vgl., Adelung, a. a. O., S. 26.

56 Adelung, a. a. O., S. 24: höheres, d. i. ausgebildetes Deutsch, Deutsch der obem Classen.

57 Vgl., Haß-Zumkehr, a. a. O., S. 108.

58 新井皓士『近世ドイツ言語文化史論』(近代文藝社, 1994年)の新高ドイツ語の記述が参考になる。

の特質が最も鋭く現れることになる。標準語を文化的なレベルの高い一部の集団が使用する言語とみなすアーデルンクとは異なり、一般理解可能性を求めるカンペは、ある特定の話者だけが用いる方言を標準語とみなすことができない。あらゆる方言から一般に理解できる方言を導き出そうとするカンペの純化論は、既に現存する方言を前提とするものではなく、新たに作り出される言語の構想である[OD 134]。事実カンペは、純化を全く新しい作業と呼んでいた。各々の方言は標準語確定の際に素材として利用されるとしても、標準語は、あくまでも完全に新しく作り出されるものである *eine völlig ausgemachte Sache* ⁵⁹。カンペの純化論のこうした側面を、オルゲルディングーは、目的論的な性格を持った言語論として積極的に解釈してみせる[OD 151, 172]。

更にカンペが具体的に説明していなかった一般理解可能性の意義もアーデルンクとの比較によって明らかになる。一般理解可能性の一般でカンペが念頭においていた話者も、特定の話者集団ではなくこれから実現されるべき話者集団であった。純化された言語は教育の有益な手段であると、カンペは強調している⁶⁰。一般理解可能性が、ある言語について話者の全ての身分また全ての成員が、その言語のあらゆる点について完全に理解できることと言い換え

られていたように⁶¹、標準語によって行われるカンペの教育は、あらゆる身分へと開かれている。カンペがなによりも重要と考えていたのは、この誰もが理解できる標準語による教育で、知識を一部の限られた知識人から下層の人々にまで浸透させることであった⁶²。標準語は教育つまり話者集団の教化の条件であると同時に、話者集団はこの教育を通じて形成されることになる。このようにオルゲルディングーは、カンペの教育者としての側面を考慮に入れ、その純化論の有する反身分制的な意義とその話者集団をこれから形成しようとする実践的側面を強調してみせる[OD 170, 183]。

§ 5 : 公共性と均質性—結論的考察

こうしたオルゲルディングーの解釈は、シーヴェ、フェアティッヒ、ハスツムケアをはじめとするカンペ研究と同じ傾向を持つと言える。これら一連の研究に共通する特徴は、カンペの純化論および教育論をナショナリズムではなく民主的なものとして位置付ける点にあ

61 [Campe 10]: Eine reine [...] Sprache nämlich, und nur eine solche allein, kann für alle Stände eines Volks und für alle einzelne Glieder derselben, nach allen ihren Theilen vollkommen verständlich gemacht werden [...].

62 Vgl., [Campe 11-12]: Da nun aber für das Wohl der menschlichen Gesellschaft Alles darauf ankommt, nicht, daß dieser oder jener einzelne Kopf, sondern daß das Volk, die große Masse der Gesellschaft selbst, erleuchtet werde; und [...] diese allgemeine Erleuchtung nicht eher Statt finden kann, als bis unter das Volk zu verbreitenden Kenntnisse in allgemeinverständliche Ausdrücke gekleidet worden sind [...].

59 [Campe 48].

60 [Campe 10].

った⁶³。「標準語とは、あらゆる地域のドイツ人を一つの民衆としてまとめあげる共通の紐帯である。それは地域の方言の違いをなくし、各々の考えを交換するための万人にとっての共通の手段である」⁶⁴。カンペは純化論の中で純化された言語が担う役割をこのように述べていた。この人々を結び付ける紐帯としての言語にフェアティッヒは社会体制への批判を読み取る。ヴォス、エバーハルトをはじめとする当時の知識人に言語を紐帯として位置付ける傾向が存在したことに言及しつつ、特にカンペの純化論には後進国ドイツの社会状況への無言の批判が込められているとフェアティッヒは論じる⁶⁵。カンペにとって言語への取組とは、そのまま市民階級 *Bürgerstand* の確立を意味していた⁶⁶。ここでフェアティッヒが強調するのも、カンペの純化論が社会の大多数をしめる民衆を対象とし、標準語を使用した民衆の教育つまりラディカルな啓蒙によって市民階級の形成を企てた点であった⁶⁷。更にフェアティッヒは、カンペに影響を与えたルソーの文明批判と

絡ませて、カンペの教育論の貴族趣味への批判を描き出してもいる。小さい頃から宮廷風に身のこなしを強要し、フランス語会話を強制することは全く自然に反するとカンペは教区論の中で述べていた⁶⁸。

またハスーツムケアは、アーデルンクとカンペの辞書の比較研究から、カンペの反社会的な性格を導出する。例えば“氏 *Herr*”の定義を確認するならば、“氏”を身分呼称と位置付け、儀礼的な意義を持つものとして解釈するアーデルンクに対し、カンペは、“氏”を身分から切り離し、成人男性につける呼称として定義している。ほぼ同時代に編纂されたにもかかわらず、両者の辞書に現れた定義のこのような違いから、身分制を所与のものとして受け入れるアーデルンクと、それを過去のものとして批判的に捉えるカンペの政治的態度の違いをハスーツムケアは浮かび上がらせている⁶⁹。

旧来の社会秩序に対するカンペの批判的な態度を強調する解釈に異論はない。しかしカンペの純化論は、たんなる社会批判という意義にとどまっていた。言語が人々を結び付ける紐帯であると述べた後に、続けてカンペは言語を意見を公にするための手段と定義していた。カンペの旧来の等族秩序への批判は、公

63 Vgl. Schiewe, Jürgen “Joachim Heinrich Campes Verdeutschungsprogramm. Überlegungen zu einer Neuinterpretation des Purismus um 1800”, in: *Deutsche Sprache*, 16 Jg., Heft 1, S. 17-33.

64 [Campe 37]: Sie [=Hochdeutsche Sprache] ist also nunmehr das gemeinschaftliche Band, welches die Deutschen aller Gegenden zu einerley Volk verbindet, und das gemeinschaftliche Mittel des Gedankenwechsels zwischen Allen, bei allen sonstigen Verschiedenheiten, wodurch ihre Land- und Kreismundarten von einander abweichen.

65 Fertig, a. a. O., S. 65.

66 Ebenda.

67 Fertig, a. a. O., S. 66-67.

68 Fertig, a. a. O., S. 82-83.

69 Haß-Zumkehr, a. a. O., S. 117; なおカンペの定義は次の通り: [...] In noch weiterer Bedeutung nennt man Herr jede erwachsene Person männliches Geschlechts, die nur nicht ganz niedrigen Standes sein darf, sonst ohne Rücksicht auf Stand, Rang, Ansehen, Alter &c.

共性の模索という形で展開されていたことを押さえる必要がある。通俗哲学者クリスチャン・ガルヴェ Christian Garve (1742-1798) も、純化論を公共性との関連で捉えていた知識人の一人であった。ガルヴェは、言語は民主的なものであると主張する⁷⁰。このホラティウスの援用でガルヴェが伝えようとしたのは⁷¹、言語は特権的な審級によって規定されるものではなく、言語の使い手である書き手と話者の双方の理解を目指さなければならないということであった。誰もが理解できる言葉による執筆活動が、啓蒙そして教育を推進する第一の条件であるとガルヴェは考えていた⁷²。

ここには標準語が拓く新たな空間が示唆されている。カンペは市民の自由に基づいた法律や、裁判や国家行政の公開性、さらに全ての市民の政治参加が実現するためには、誰もが理解する純化された言語が獲得によってはじめて

可能になると述べていた⁷³。つまりカンペにとって純化論とは万人が参加しうる新たな社会体制を形成するための条件であったのである。例えば当時の知的交流の倍であった読書協会が、非識字層を実質的に排除していた状況をここで思い起こしてみればよいであろう⁷⁴。更にまた標準語は、カントが哲学部の役割として論じたあらゆる真理の検討や、学者としての資格で読書界に語りかけることが可能となる空間であったとも言えるだろう。カントの主張する真理の検討では、言語によって展開されることが要求されており、それは共通の表現の手段が整備されてはじめて可能になるようなものであった。

ただし紐帯としての言語は、等族体制下の垂直的な身分規定から、国民という均質的な身分規定への移行にも結び付くものでもあった⁷⁵。人々を結び付ける紐帯としての純化された言語・標準語は国語となり、標準語によるあらゆる身分に開かれた教育は、そのまま当時の君主制下で進められた言語改革の理念にそのまま合致したものであった。

当時の君主権力は様々な教育改革を試みて

70 Garve, Christian "Einige allgemeine Betrachtungen über Sprachverbesserungen", in: Ders., *Sammlung einiger Abhandlungen aus der Neuen Bibliothek der schönen Wissenschaften und der freyen Künste*, 2. Theil, (Leipzig, 1802, Nachdruck: Georg Olms Verlag, 1985), S. 317-357; S. 340: Wenn irgend ein Theil der menschlichen Angelegenheiten unter einer demokratischen Verwaltung steht, so ist die Sprache.

71 Cf., Michaelis, *op. cit.*, p. 8: C'est, une mot, une Democratie, où la volonté du grand nombre decide de l'usage; & Horace nous dit que dans les langues l'usage est la Loi supreme; Horatius, *De arte poetica*, 71-72.

72 Garve "Von der Popularität des Vortrages", in: *Vermischte Aufsätze, welche einzeln oder in Zeitschriften erschienen sind*, Theil 1, (Breslau, 1796, Nachdruck: Georg Olms Verlag, 1985), S. 331-372; S. 350: Man kann also mit Recht sagen, daß der höchste Grad der Vollkommenheit und Ausarbeitung philosophischer Ideen dann erst erreicht ist, wenn sie sich allen Menschen von gebildetem Verstande, auf eine leichte Art, mittheilen lassen.

73 Vgl., [Campe 10]. ここでカンペは(アーデルンクが主張するような)標準語が一部の知識人の間で通用する言葉にとどまっていることを同時に批判している。

74 Cf., 三成美保「コミュニケーション過程としての啓蒙主義—十八世紀末ドイツの読書協会」『コミュニケーションの社会史』(編者: 前川和也, ミネルヴァ書房, 2001年) pp. 277-313; p. 303.

75 例えば農民の確保の為に身分制が維持されていたように、この均質性は、身分制の完全なる排除が目指されていたわけではない。

いた。特にプロイセンでは、アビトゥアや教員採用試験が導入され、更に定期的な学校監査も組織的に試行された。こうした制度の整備と並行して、教育内容も細かく規定されることとなった。その中でも特に重視されたのが言語教育 *das Lesen, Buchstabiren und das ABC* であった⁷⁶。カンペらがすすめた純化論は、国語教育の理論的基礎を提供するものであり、あらゆる身分に開かれた均質的な言語空間を作り出すことで君主制を支えることになる。本稿で詳しく言及しないが、カンペが教科書を編纂していた事実をここで考えあわせてもよいであろう。紐帯としての純化された言語は、まさに人々を国民として結び付ける紐帯でもあった。このようにカンペの純化論は、専制君主制と民主主義との間を揺れ動くものであったと言えるだろう⁷⁷。

純化論（辞書編纂）に取り組むことは、それぞれ独立した諸民族（複数の話者集団）を集合体へと統合する可能性への希望を与えてくれる⁷⁸。この一文をカンペは自らが編纂したドイ

ツ語辞書の序文の最後に織り込んだ。改めて確認しておかなければならないのは、純化論が一方で等族的な重層的な政治空間から国家の臣民という均質的な政治空間の形成と同時に、この旧来の身分制への批判的として新たな社会体制の創出という二つの流れの結節点に位置していたことである。つまりカンペが純化論によって模索した話者集団（一般理解可能性の一般の人々）とは、市民的集団であると同時に国家の構成員でもある両義的な存在であったということだ。そしてこの両義性から、純化論が市民社会の実現されざる一つの構想であったことが逆に確証されるのである。

この両義性を更に展開するためには、カンペが言語に託した表現の手段としての役割やそれが開く公共的な空間についての解明が必要となる。というのも純化された言語は、それ以降国語と同一視されることになり、グリム⁷⁹やジャン・パウルの批判が示すように、カンペやアーデルンクを含む一連の純化思想は一昔前の言語浄化論者 *Sprachreiniger* として一緒に批判されてしまうからだ⁸⁰。結局のところ表現の媒体として言語を捉えたカンペの問題意識は次の世代に引継がれることはなかった。純化論と公共性の関係を解明するためには稿を改めよう。その際には同じく十八世紀後半に議論された出版の自由 *Pressfreiheit* の問題や、純

76 "General=Land=Schul=Reglement, Berlin, den 12. August 1763" in: Friedrich's des Großen Pädagogische Schriften und Äußerungen, übersetzt und herausgegeben von Jürgen Bona Meyer, Langensalza, 1885, (Nachdruck: Scriptor Verlag, 1978) S. 123.

77 Cf., Jelavich, Peter *Munich and Theatrical Modernism*, (Harvard University Press, 1985), pp. 15-17.

78 Campe, Wörterbuch der Deutschen Sprache, veranstaltet und herausgegeben von Joachim Heinrich Campe, (Braunschweig, 1807), S. XXIII: Sie [=unsere herrliche Sprache], das einzige letzte Band, welches uns noch völkerschaftlich zusammenhält, ist zugleich der einzige noch übrige Hoffnungsgrund, [...] der die Möglichkeit künftiger Wiedervereinigung zu einer selbständigen Völkerschaft uns jetzt noch denkbar macht.

79 Vgl., Grimm *Deutsches Wörterbuch*, Band 1, Sp. XXIII-XXIV.

80 Vgl., Paul, Jean *Vorschule der Ästhetik*, XV, , 85.

化運動の事実上の母体であったドイツ語結社
Deutsche Gesellschaft の役割などをあわせて議
論することが必要となるだろう。

(よしだ こうたろう・東京外国語大学大学院)